

NEWSLETTER

No. 13

岐阜大学国際交流室 1992年2月20日

《新任教授 紹介！》

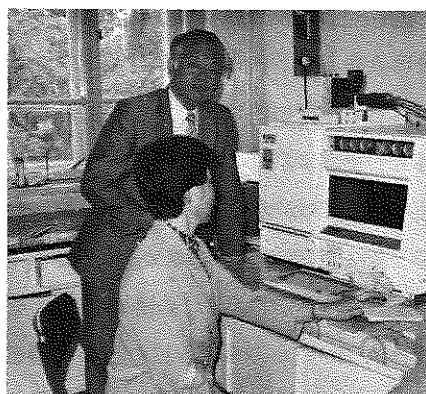
昨年の10月、教養部に日本語・日本事情担当教官として中須賀先生が着任されました。先生の専門は分析化学ですが、留学生教育の経験も豊富で岐阜大学における新しい“国際交流”に大きな期待がかかります。

「本邦初の英語教師・ジョン万次郎」

教養部 日本語・日本事情 中須賀 徳行

この10月から岐阜大学で留学生教育を担当することになって間もなく、母を見舞うついでに高知県立図書館を訪れ、中浜万次郎の「亜墨利加詞（アメリカコトバ）」という小冊子を見ることができた。土佐の田舎から鯉釣りに出かけて遭難した少年万次郎が、10年後沖縄の摩文仁（マブニ、ひめゆりの塔の近く）に上陸したことはよく知られている。ペリー来航の2年前、万次郎、24才の時であった。

小冊子には蒸気船などを図解した後に、英単語の発音が片仮名で記してある。最初に天とあり、



ハルビン師範大学にて（1989年6月）

ヘブンとある。次が地で、発音はグラヨンである。金はゴタル、水はワタ、風はウイン、夜はナイ、島はアイランといった調子である。こうしてみると、私のように目から（文字から）入った英語学習者の欠点がよく分かる。トの付かないnightなんてと言うところだが、native speakerにとってみれば、先ずは耳から慣れなければならなかった万次郎の英語の方がずっと聞きやすいに違いない。

今は土佐清水市となっている中浜村に帰ってきた時、村人に聞かれて答えた小冊子があって、郷土史家の橋田庫欣氏が発掘したのを見せてもらったことがある。同じ

ような単語がならんでいたが、子供はチルレンとあった。ドのないのがみそで、なるほどと感心したことを覚えている。それには添え書きがあって、「王ハ四年四年ニテ代ル、徳アリテ下和スル時ハ又四年、都合八年ヨリ上ハ無シト言フ」とある。

ペリーが翌年の回答を約束させて久里浜を去るや、万次郎は幕府に呼び出され、老中阿部正弘の前で林大学頭らが「(北米の)共和政治州とは」と質問するのに同じようなことを答えている。そしていったんはペリーとの通訳に決定しながら、前水戸藩主徳川斉昭らの強硬な反対にあって覆ってしまった。しかし、その聞き書きなどを通して坂本龍馬や中江兆民らの共和制論や自由民権思想にも影響を与えたことであろう。

また万次郎は、捕鯨船の中で強盗未遂事件を起こしたホートンという老人をかばって帰国させ、幕府の不興をかっている。自分たちを助けてくれただけでなく、東海岸で中等教育まで受けさせてくれたホイットマンフィールド船長をはじめ、多くの人々から外国で恩情を受けてきた万次郎としては、個人的感情としても黙過できなかったのであろう。後に開成学校(現在の東京大学)の英語の教授になったとはいえ、華やかな表舞台から姿を消した裏にはそうした事情があったと言われている。「国際化」や「国際交流」が叫ばれて久しいが、その内実とは何だろうかと万次郎のことに付けても思う今日この頃である。

昨年の10月、菅原国際交流委員長と藤井国際交流室長が岐阜大学・ルンド大学間の協定書の見直しのためにスウェーデンのルンド大学を訪問されました。

いろいろな人々とのたくさんの出会いをおみやげに帰国された先生に、“交流の原点”の一部を報告していただきました。

『魔法使いのズダ袋』

国際交流室長・工学部 藤井 洋

コペンハーゲン発ルンド行きのバスは、ルンドの街の中心にある銀行の前に着く。ここにリンデル教授が迎えに来てくださることになっていた。着いてみると、まさに銀行の入り口のドアの真前で、石畳の歩道の巾は2mぐらいしかなく、思いがけなく人でごったがえしていた。リンデル教授には会ったことがないのでどんな人なのかと思っていたら、魔法使いが愛用するスカーフをかぶって、左手にズダ袋を下げた怖いおばあさんが、僕を睨みつけながら近寄ってきて、いきなり右手を突きだした。この人が、東南アジア研究所長で、有名な言語学者、ヨーロッパのほとんどの言葉を解し、中国語・タイ語を完全に読み書き話し、さらにKammu*人その他文字をもたない少数民族の

*Kammu: 日本語になおせなかったので音に一番近いアルファベットをあてておきました。

言語の辞書を著しておられるリンデル教授だった。岐阜・ルンド両大学の交流協定のキーパーソンである。

ホテルまで一緒に歩いて行ってチェック・インを済ますと、リンデル先生がズダ袋から色々な物を取り出し始めた。まず、ルンドの街の地図。その次にルンド大学の地図。これがびっくりすることにルンドの街の地図と同じスケールでかかっている。違いは街のあちこちに赤い丸があって、そこに番号がふってあるだけである。ひとつひとつの番号は大学の各建物に対応していて、それがなんと95もあり、街中に散らばっている。ルンド大学は8学部170学科の大学で、学生数25,000人、教職員数6,000人、これが人口わずか80,000人のルンドの街にあるのだから、こうなるのは当然といえば当然だろう。

次に、「私達はあなた方をノックダウンしてやろうと考えているのよ。」と、にこりともしせずに云いながら取り出されたのが、我々の滞在期間中の予定表。「う～ん、これぐらいでは死にはしませんが、眠る時間はなさそうですね。」「それは良かった。その意見を変えないでちょうだいね。」この約束はかろうじて守ったけれど、最後にルンド大学を離れて夜行列車に乗ったら、ストックホルムに着いて車掌に揺り起こされるまで全く前後不覚だった。

早速見学を始めたが、どこの学科へ行っても、やっているプロジェクトの視野がともかく面白い。これは説明しだすときりがないので、菅原先生ご到着前の訪問のうち、一つだけをご紹介します。建築学科のヘッド・ロイタスバルド教授は、やたらに背が高く、なかなかの好男子である。身のこなしもどことなくダンディーで、いまでも女の子にもてるんだぞ！と云わんばかりだが、残念ながら髪の毛が数えられるぐらいしかなく、前歯が一本欠けている。ここでやっている研究のひとつに、優れた断熱効果を持つローコスト住宅の設計というのがある。スウェーデンでの山小屋かロシアの僻地のためかと思ったら、なんとスーダンで実験をやっている。暑い地域の開発途上国が第一のターゲットだそうだ。開発途上国のためとは面白いと云ったら、それならこの人のやっているのも面白いよと云って、もう一人の研究者アネット・シールを呼んで紹介してくれた。会ってびっくり、スウェーデンでは滅多にお目にかかれないとんでもない美人で、20代後半か30代だろう、まぶしいぐらいの金髪である。この人がまた、アメリカの西部なまりの英語を上手に話す。いったいどうなっているんだと聞いてみたら、アメリカで育ったのだそうだ。ここでは、屋外はひどい天気、みんなうす汚れたようなオーバーコートを着て歩いているが、屋内では暖房がしてあるのでえらく薄着である。話に集中していないと、視線が余計なところに行ってしまいそうで困ってしまった。ともかく、彼女は薪を燃料に使った高効率のキッチンストーブを開発しているという。熱帯雨林に住む人達は、周辺の木だけが燃料源で、これを使って煙だらけの家の中で料理をしている。良いキッチンストーブを安く作って、スウェーデン政府にそれらの国々に寄付させようという話である。「僕の母はご飯は薪で炊いていたが、料理には炭を使ってました。木から炭を作って、炭用の効率の良いストーブで料理するのと、木を直接燃やしてあなたのストーブで料理するのとでは、労

力全体、あるいは森林エネルギー全体としてはどちらがより効率的だろうか。」という議論を持ちかけて、昼食をはさんで、実に楽しい1時間半を過ごした。もちろんすぐ結論がでる問題でなく、お互いに検討を約束して中断した、ところが岐阜大学に帰ってから2週間もしないうちに早速彼女から手紙がきた。まだ、返事を書いていない。ほんとはこの記事を書いているところではないのかも知れない。

皆さんご存知のように、このルンド大学と岐阜大学とは夏休みに学生の交換を行っている。昨年も、岐阜大学から12名の学生が3週間ルンドに滞在してサマースクールを受けてきた。これに参加した学生の話聞いたとき、「エクスカージョンのうちで一番楽しかったのは、ノルウェーとの国境近くにある小さな島へ一泊二日で連れて行って貰ったバス旅行です。」「バスの運転は、よくわからなかったがどこかの歯医者さんがやってくれました。」という話を聞いていた。さて、私の滞在中の金曜日の夜に、ブラットホール教授の家の夕食会に、ほかのルンド大学の数人の教授夫妻と共に招待された。ブラットホール教授はちょっと小柄で、いつも目をきらきらさせながら話す、とても優しい人で、歯学部で学部長である。英語とフランス語に堪能で、月のうち $\frac{1}{3}$ はジュネーブで国連のWHOのために働いているという、国際的な学者である。話をしているうちに、岐阜大学の学生諸君はとても明るい、良い子達だねといわれる。何でご存知なのかと思っていたら、今年の夏この子達と二日間一緒に旅行をしたんだよといって、アルバムを出してきて見せてくれた。バスを運転してくれた歯医者さんというのは、なんと、このブラットホール先生その人だったわけである。うちの学生はそんなことは意に介さなかっただろうと気付いたとたん、食後のグランマニエールのグラスが指からすっぽ抜けてしまった。見せて頂いた写真は、岐大の学生がお礼状と共に送ってくれたものだと聞いて、ほんとに胸をなで下ろした。

その明るく日の土曜日は、ウエストリング学長がホテルまで迎えに来てくださることになっていた。もちろん僕は会ったことがない。ちょうど8時にホテルのロビーに、汚い、よれよれのジャンパーを着て、ペンキだらけのズボンを穿いた大男が現れた。昔は確かに青かったのだろうと想像できる毛糸のボウシをかぶって、足にはゴムの長靴を履いている。その大男が銀行強盗風にのそっと入ってきて、ロビーにいる人たちをじろじろ見回すものだから、周りの空気が緊張した。僕には、ああこれが学長だとすぐわかった。なぜなら、この学長はヨット気遣いで、この夏は6週間大学を休んでフランス沿岸まで航海したという話を聞いていたし、今日は僕を彼のヨットに乗せてくれることになっていたからである。この日のセーリングの話はまたの機会にゆずるが、この学長の家でもまた、今度はバルザマスを利用したコーヒークップを取り落としそうになった。前々回、岐大の学生のためのサマースクールをやったとき、2人の学生がヨットを持っている面白いオジサンに家にホームステイさせて貰ったと話していた。そのオジサンとは、ウエストリング学長であったことを知ったからである。

この滞在中に、菅原先生も僕もこのルンド大学でいかに多くの人たちが岐阜大学の学生のために

親身になって係ってくれているのかが、よく解った。現在、ここで障害者教育の勉強をしている教育学部4年生の石田祥代さんの明るい笑顔が、何にも増して雄弁であった。また最後の会議の席上で、学長が出席者全員に、「これまで両大学で行ってきた学生の交換のプログラムで、何か問題がありますか？」と聞かれたとき、リンデル教授が「あります。」とって恐い声で答えられたのもパンチが効いていた。「ひとつ困った問題があります。岐阜大学に行ったことのある学生は皆んなまた行きたいと云うし、運良く岐阜大学に長期滞在した学生はみんな帰りたくないと云い始めるのです。」

この両大学の関係が今後、もっと発展していくように希望します。残念ながらここでルンド大学を詳しく紹介することは到底できません。しかし今回、菅原委員長と僕とで55人の人に会いましたが、皆さんとても楽しんで自分の仕事をしているように見えたことはご報告しておかねばなりません。また会話のほとんどが冗談で成り立っており、ただ話をしていても、議論をしていても、実に愉快で、後味が爽やかです。1年の $\frac{1}{3}$ は雨と風と長い夜というひどい所では、これは何より大切なことなのでしょう。最後に、ウエストリング学長からの「岐阜大学の教官・学生、どなたでもいつでも大歓迎ですよ。」というメッセージをお伝えします。この方面に行かれるときは、ぜひ国際交流室に声をかけてください。すぐファックスで連絡をとります。

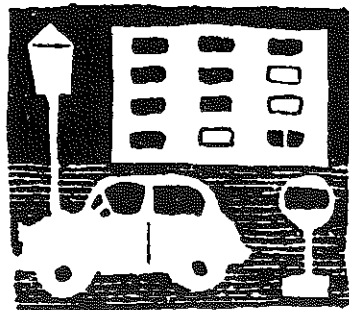
1992年1月

《投稿コーナー》

日本に車は多すぎる

医学部病理学第1 汪 愛今

日本の経済にしたがって車はますますふえてきた。平均的にたぶん二人に一台の車があるかもしれない。車をもっていると通勤とあそびに便利だ。だけど、車が多いのでわるいこともいっぱいある。まず、燃料の問題だ。車はたくさんガソリンをつかう。世界中の石油は早くすなくなる。次に車の排気は人類の健康を損害する。呼吸器の病気と癌はこの排気とつよい関係がある。病気になったら、医療費はたくさんかかる。もうひとつは空間の問題だ。車が多いので道は広くなければならないし、多くなければならない。駐車場も多くなる。だから、車によって陸地はもっとせまくなる。もともと混んでいる町はもっと混んできく。最後に車が多いので交通事故はふえる。日本での一番主要な人間の死因は癌ではなく交通事故だ。



時 間 割 1991年度 後期 (平成3年10月14日～平成4年2月21日)

	月	火	水	木	金
9:10	初級クラス1 [加藤] (文法) 中級aクラス① [及川] (総合) 上級①クラス [河地] (作文)	初級クラス3 [後藤] (総合) 中級bクラス1 [及川] (総合)	初級クラス5 [中島] (漢字)	初級クラス6 [及川] (総合) 中級aクラス④ [河地] (漢字)	初級クラス8 [後藤] (総合) 中級bクラスⅡ [加藤] (文法)
10:40					
10:50	初級クラス2 [河地] (総合) 中級aクラス② [中島] (総合) 上級②クラス [加藤] (文法)	初級クラス4 [中島] (総合) 中級aクラス③ [後藤] (文法)		初級クラス7 [及川] (総合) 中級aクラス⑤ [河地] (作文)	初級クラス9 [加藤] (文法) 中級bクラスⅢ [後藤] (総合)
12:20					☆英会話クラス (12:30～13:30)
13:30	医学部 上級クラス1 [及川] (13:00～14:30)			医学部 上級クラス2 [後藤] (13:00～14:30)	
15:00					
15:10	医学部 中級クラス1 [加藤] (14:40～16:10)			医学部 中級クラス2 [中島] (14:40～16:10)	
16:40					

編集後記

揺れ動く国際情勢の中で1991年があわただしく終わりました。まごつき戸惑いながらも、心を新たに国際交流の活動を地道に続けたいと思います。遅くなりましたがニュースレター (No. 13) をお届けします。ご投稿いただいた皆様に厚く感謝申し上げます。ニュースレターについてのご意見ご感想などを国際交流室までお寄せ下さい。[K]

発行 岐阜大学国際交流室

〒501-11 岐阜市柳戸1-1

☎ (0582) 30-1111

内線2380/2381

編集 丸山清史・中島智巳